

# 観光研究所 だより

Vol.6  
No.2

Spring 2010

## CONTENTS

今なぜ国家試験「旅行業務取扱管理者」資格取得が有効なのか …1～3  
 内田 二郎氏 インタビュー(株式会社JTB能力開発 教材出版事業部部長)

公開講座「旅行業講座」のご案内 …………… 4

2010年度「旅行業講座」詳細 …………… 5

2009年度「ホスピタリティ・マネジメント講座」活動報告 ……6～7  
 2009年度観光研究所活動報告

2008年度 研究調査報告 ……………8～9  
 松村 公明

シリーズ 韓国最前線 ……………10  
 劉 亨淑

シリーズ 九州便 ……………11  
 曾山 毅

所長の海外体験記 その9 ……………12  
 小沢 健市(観光研究所長)



発行:立教大学 観光研究所  
 〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1  
 TEL.03-3985-2577 FAX.03-3985-0279  
 E-mail : kanken@grp.rikkyo.ne.jp  
 www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IT/

### ～今なぜ国家試験「旅行業務取扱管理者」 資格取得が有効なのか～

株式会社 JTB能力開発  
 教材出版事業部 部長 **内田 二郎 氏**



#### 内田 二郎氏 略歴

1955年 神奈川県横浜市生まれ。  
 1979年 横浜国立大学経営学部卒業、株式会社日本交通公社(現ジェイティービー)入社。  
 宮崎支店勤務。  
 1986年 神戸三ノ宮支店勤務。  
 1990年 JTBヨーロッパに出向。  
 同マドリッド支店勤務。  
 アシスタントマネージャー。  
 1996年 JTBヨーロッパ欧州支配人室マネージャー。  
 2000年 首都圏メディア販売部海外旅行課長。  
 「旅物語」の企画、手配を総括。  
 2001年 JTBワールドパッケージング勤務。  
 ルックJTBヨーロッパ商品の企画を担当。  
 2002年 JTB国際旅行事業部(現GMT＝グローバル・マーケティング・トラベル)チームマネージャー。  
 サンライズツアーの企画、手配、販売を総括。  
 2006年 JTB退社。株式会社ジェイティービー能力開発教材出版事業部次長。  
 2009年 同教材出版事業部部長。

旅行業に携わりたいと思う多くの人々が取得を考える資格「旅行業務取扱管理者」。その国家試験対策準備講座として当研究所が運営する「旅行業講座」において、長年に渡り教材面や講師の派遣等で多大なご協力を頂いている組織の一つに株式会社JTB能力開発があります。以前は新卒大学生の憧れだった旅行業界への就職志望率が、近年では年々低下傾向にあるといった問題の打開策、また当資格の社会的な位置づけや、今資格取得に挑戦することの利点、意義について、この道のエキスパートの視点から、教材出版事業部部長の内田二郎氏にご意見を伺います。



JTB研修施設フォレスト 外観1

5Q  
5A

#### 「人」内田二郎氏にQ&A!

- ①一日を快適に過ごすために心がけている事は?  
ぬかりのない準備とONとOFFの切り替え
- ②最近感じた「幸せ」は?  
体重が落ちたこと  
娘の結婚が決まったこと
- ③好きな言葉は?  
ケ・セラ・セラ(なるようになるさ)
- ④現職に就いていなければどんな道に進みたかった?  
プロボクサー(ボクシング経験はありませんが)
- ⑤今の仕事のやりがいとは?  
全国の観光教育を実施している学校にお邪魔して先生方と知り合い、お互いの情報を交換すること、また自分を介して新たな人の輪ができること。

■JTBグループの中での「JTB能力開発」の役割と業務内容についてご説明ください。

JTBグループの中で観光関連産業をベースとした教育、文化事業を行っている会社です。

事業内容には主に柱となっているものが5つあり、研修事業（企画と実施）、教材の発行と販売、通信教育、検定（旅行地理検定、インターネット旅行情報士検定）、能力開発システム（Web上のシステム）を利用した採用試験・ご当地検定・Webラーニングなどの受託事業があります。

■ご自身が旅行業界に入られたエピソードは。

私は生まれも育ちも横浜で、昔は実家から遙か彼方に横浜港が見えていました。その港にいつも外国からの客船が停泊しているのを見つ、その向こうには（当時はアメリカしか知らなかったの）アメリカがあると感じ、幼な心に憧れていた訳です。そして、いつか海外に行ってみよう、海外に行く仕事に就きたい、それが更に高じて、海外で仕事をしたいと思うようになりました。ただ、海外で仕事をすればなら旅行業でなくてもよかったのですが、堅い仕事ではなく、遊びだか仕事かわからないような仕事がしたいという、いささか不謹慎な気持ちから旅行業界を選びました。

■近年観光学部生を含む学生の旅行業界への就職志望率が低下しています。

旅行業のマイナスの側面が大学生だけでなく、専門学生、更には高校生にも周知されてきた事も原因の一つかもしれません。具体的には、旅行業というのは労働時間が長く、仕事も厳しい割に給料があまり高くないという実態が知れ渡ってきた、つまり単純に「就職先」として見た時にあまり魅力的に映らない。旅行業そのものが好きな場合には問題ないのかもしれませんが、一昨年辺り迄の就職活動は「売り手市場」で、一人の学生が複数の内定を取れる状況にありましたから、その場合、条件の良くない職種として比較的早い段階で選択肢から外されやすいところがあったと思います。

一では、今後の展望は。

政権交代に伴い、今観光業界には「観光立国」というスローガンの実現を目指す国からの追い風が吹いています。前原国交大臣の最近の発言にも見られますが、観光を日本のこれからの中心産業にしていこうとする動きがあり、来年度の予算編成においても観光予算を現状の二倍に、また、以前から訪日外国人の数を2010年に1000万人、2020年には2000万人を目指すという目標数値がありました。その目標を少し前倒して、2016年に2000万人を目指す、とかなり前向きです。その中で旅行業界として何をすべきか、ということになりますが、マーケット自体も昔のような大量供給時代、つまり団塊で動く時代から、個人、家族単位で動く時代になってきており、それに見合った商品が出来上がりつつあります。また、旅行会社のみならず、各地の観光協会やNPO団体などから地元ならではの観光要素を取り入れた面白い着地型商品がどんどん出てきています。ただ、そうしたものがまだ商業ベースに乗りきれていないとは言えないので、この辺りが流通していくようになると、旅行業界としてもかなり面白くなるでしょう。また、面白い商品が出来てくれば、業界に入りたいという人も増えてくると思うので、決して悲観的な要素ばかりではないと思います。

■「旅行業務取扱管理者試験」の性格や国家資格としての位置づけについてお話しください。

「旅行業務取扱管理者」は、旅行業法上で一営業所に一名以上、十名以上の営業所なら二名以上置



かねばならないとされる国家資格です。もっと端的に言えば、「旅行業のプロとしての国のお墨付き」、つまり「これくらい知らない旅行業のプロとは言えない」という資格です。試験には国内と総合の二種類がありますが、昨年の例では、国内の合格率が32%台、総合が34%台\*という難関の国家試験の一つだと思います。

この資格を取るの意味ですが、まず、旅行業界というのは極めて実務的な業界であって、国家試験で出てくるような内容を基本的に身につけていないと、その最前線での業務が成り立たない世界です。もちろんマネジメントを担当する層、オペレーションを担当する層とありますが、基本的にはマネジメント層であっても、その前に優れた実務家であるべきです。そうした意味では、旅行業に携わる方全員が持っている当然という位置づけにあると思います。例えば、医者と患者の関係を考えた時に、患者には一般的に医者ほど医学的知識はありません。しかし、旅行者とお客様の関係の場合、旅行者よりも知識の多いお客様が実際におられます。それでは旅行業のプロとしては失格ですから、そういうお客さまさえも凌駕するような知識がどうしても必要となります。その最低限のレベルをこの資格が網羅しているということです。

一本資格の観光産業の人材育成との社会的な関わりは。

観光立国推進基本法に則って、魅力ある観光サービスを提供するためには、観光マネジメントの高度化が重要であると言われていますが、その観光マネジメントの対象となるのは、経営者、最前線の接遇者、そして経営者と接遇者を結ぶ管理者です。その中でもとりわけ、接遇者と管理者に該当する人財の育成に欠かすことのできない手段の一つがこの国家試験と言ってよいと思います。

■旅行業界の各職種において、この資格はどのような意味合いを成すのでしょうか。

旅行業界の職種としては、募集型企画旅行（パッケージツアー）の企画をしている方、交通機関、ホテル等のサービス（部品）を仕入れる方、そのオペレーションに携わる方も旅行業者です。海外旅行で言えば、海外での地上手配を請け負う方も含まれます。そういう方々にとってもこの資格は必要となってきますが、それは資格そのものというよりも、業務に十分な知識を有しているという意味合いが必要だと考えられます。また、ツアーコンダクターという職種については別の位置づけになり、必ずしも旅行業務取扱管理者の資格ではなく、平成八年からの制度改定により、チーフコンダクターとして業務を遂行するに当たっては、「旅程管理者」という資格を持つていなければなりません。

■旅行業界での就職を望む方々に求めたい必要不可欠な資質とは？

旅行会社によって異なると思いますが、敢えてまとめるとすれば、旅行業界において一番大切なのは、「お客様をハッピーにするため

の資質」「お客様の求めるものを提供し、満足させるための資質」ということになります。具体的に言うと、コミュニケーション能力、つまりお客様の求めるものを的確に理解するヒヤリング能力、そして最も基本的な部分となるホスピタリティマインド、例えば、お客様がどういう状態におかれているのかを感じ取る資質、そして、実際にソリューションを与えるための具体的な知識が必要とされます。また、現場に出て行った際の現場対応力。旅行業界の現場では、全く予期せぬ出来事が起こりますが、その時に自分で考え、その場で解決策を見出し、行動を起こすという力も必要です。

#### —最近の学生の傾向として不足していると感じる点は。

この十年間で海外旅行に行く大学生の数が35%減少しました。少子化という理由もありますが、その主な原因は、綺麗な景色を見るだけなら敢えて海外旅行に出かけない、現地の人との交流といった労を厭う等、極めて表層的なものだけで満足し、そこから奥にあるものを求めなくなった事があります。昔は「何かあるかもしれない」から海外に行きましたが、今では「何かあるといけない」ので海外には行かないという風潮があるように思います。確かにテロ等様々な危険は増しているかもしれませんが、敢えてそれを乗り越えていく、というのが若い学生の特権であったように思うので、少し寂しい気がします。旅行業は、特に添乗業務に出れば何が起るかわかりません。教科書など無い訳ですから、経験の有る無しに関わらず、自分の判断に頼るしかありません。ですから、若いうちに様々な経験しておくというのはとても役に立つはずですよ。

#### ■将来の旅行業界を担う人材を採用するために、御社はどのようなことをしていますか。

JTBグループとは2006年に分社化を実施し、総合旅行業から交流文化産業への道を歩み始めました。それに伴い、交流文化産業を担い、グローバル化を進めていける「人財」を育てようという動きがJTBの中にあります。それを横断的に展開するシステムを「JTBユニバーシティ」と呼び、当社もそこに深く関わっています。その中では、新入社員教育、ビジネスリーダー教育、次世代の経営者教育、経営者教育等の段階に応じた水平方向の教育を行っています。また、各階層を垂直方向に貫く教育としては、ダイバーシティ教育、企

業の社会的責任に関する教育（CSR）、コンプライアンス（順法）教育等を実施しています。

#### —採用者に対する教育は。

入社前教育として、入社前年の12月から基本的な観光地理等の教材と時刻表を提供してWebテストを課し、旅行業のプロとして恥ずかしくないだけの知識を身につけさせておきます。また、入社後はJTBの経営理念やビジョンをしっかりと身につけてもらう事が主になります。つまりここからJTBユニバーシティが始まっているといえます。そして、独自の研究施設フォレストがビジネスキャンパスとなり、ここでほとんどの研修が実施され、新入社員教育においては、泊まり込みで行われます。24時間寝食を共にすることによって、講師、先輩、そして同期間でも触発され、JTBグループに入ったのだという結束感が高まる等の効果が得られます。

■昨年から続く世界的な経済不況、新型インフルエンザの流行等、旅行業界を取り巻く環境は日々困難なものとなっていますが、乱立する旅行業社が今後生き残りをかけて求められる要素とは？  
潜在成長力が最も高いと思われるインバウンド（訪日外国人）、また単にインバウンドだけでなく、例えば、アメリカ人をヨーロッパに送る、ヨーロッパの人たちをアジアに送るといった更にグローバルな視点を持った新しいビジネスモデルを作れるかどうかか鍵になると思います。また、他社と明確に差別化された卓越した商品の企画力や、その商品をきちんと説明して売れるだけのコンサルティング能力を備えた会社は勝ち残っていけるでしょう。また、専門性を追求することも重要な要素かと思えます。

#### —新型インフルエンザ対応について。

これは残念ながら旅行会社として予防できるものではありませんが、リスクマネジメントとして、お客様の中で旅行前に発生した場合、旅行中に発生した場合についてのマニュアルは具体的に出来上がっています。予防が不可能であるため、起きてしまった場合のダメージをどれだけ最小限に止められるかという点に集中してマニュアル化されています。

#### ■最後に、この業界の魅力とは一言で何でしょうか。

一日として同じ日はない、つまり緊張感もありますが、変化に富んだ面白さのある世界だということです。変化が苦手という方には不向きかもしれませんが、こんなにダイナミックで面白い世界はないと思います。お客様一人一人にどれだけの満足を与えられるだろうという醍醐味、「一客一喜」という言葉はありませんが、旅行業界にいる側としてのこうした達成感が一つ一つの喜びとなり、それが瞬時に現れる面白さがあります。そして、何よりも広い世界が見られることでしょうか。

#### —本日はお忙しい中ご協力有難うございました。

（取材日時：2009年11月7日）

\*インタビュー後発表された平成21年度の全国平均合格率国内は40%台、総合は25%台（全受験者ベース）となった。



JTB研究施設フォレスト 外観2

## 公開講座「旅行業講座」のご案内

本講座は、国家資格である「国内・総合旅行業務取扱管理者試験」受験のための準備講座です。

### ■プログラム概要

当講座では、旅行業務を取り扱うための基礎となる各種実務知識や関係法令などについて、実践的な講義と解説を行います。全ての講義内容が「国内・総合旅行業務取扱管理者試験」の対策用講義となっているため、本試験受験を希望されている方にとっては最適であり、当講座受講生の過去の試験合格率は例年全国平均を大幅に越えています。講義の内容自体はかなり専門的な分野に渡っていますが、旅行実務経験のない方にもわかりやすく、また旅行業実務に従事する方々の要求水準にもお応えできるような講義の進め方に定評があり、全ての受講生に対して十分に配慮されたものとなっているのが特徴です。

### ■お勧めしたい方

- 旅行業界への就職を目指す各大学、専門学校在学学生および卒業生
- 関連業界に従事している社会人の方々

### ■講座の特色

1. 「総合・国内旅行業務取扱管理者」試験準備として最適の内容の講義
2. 旅行関連業界に長年携わってこられた優秀な講師陣

3. 約3カ月の受講期間中、総合46回、国内23回、海外23回の講義を実施
4. 当講座受講生には、立教大学本館図書館、総合研究センター図書館が利用可能な図書館利用証を配布の他、8号館コンピュータ室利用用のアカウント証も発行
5. 各コース全講義の3分の2以上出席した受講生には修了証書を授与

### ■2009年度「総合・国内旅行業務取扱管理者試験」

当講座受講生合格率

国内合格率	51.5%	全国平均	40.1%
総合合格率	30%	全国平均	25.5%



2009年度「旅行業講座」修了証書授与式会場にて

## 受講生の声

### ●あきらめないことが合格への道

私は、初めこの資格を取ることは、非常に難しく、9月頃までずっと勉強し続けないと受からないのではないかと考えていました。実際、これから受講を考えている人の中にもそのように思っている人がいると思うので、少しでも不安を取り除くために私の経験から感じたことをアドバイスしたいと思います。

実は私は夏休みに全く勉強せず、資格取得をほぼあきらめていたのですが、無事に総合の資格を取ることができました。後になって考えてみると、大切なのはやはり毎回の講義を集中して聞くことと最後まであきらめないことだと思います。初めは、教材の多さや覚えることの多さに戸惑い、途中で面倒くさくなることもあると思うのですが、講義さえしっかり受けて重要なポイントをつかんでおけば、何とかなるものです。9月には模試もあるので、是非受験することをお勧めします。私の場合はこの模試のE判定がきっかけで、また頑張ってみようという気になりました。

(立教大学観光学部2年・男性)

### ●講座は合格のためのエッセンス

私は昨年国内旅行業務取扱管理者試験を受験したのですが、あと少しのところまで合格できず、大変悔しい思いをしました。そこ

で、今年こそは絶対に国内・総合両方に合格しようと思い、講座を受講しました。

総合旅行業務取扱管理者試験は科目数が多く、膨大な知識が必要とされるだけでなく、各科目で一定の点数以上を取らなければならないので、大変難易度の高い試験となっています。しかし、この講座ではプロの講師の方々ポイントを絞って解説してくださり、講義に疑問点がある場合でも、講師の方々一つ一つ丁寧に答えてくださるので、効率よく全科目の勉強を進めることができます。

7月に講座が終了して以降は、自主学習になるのですが、講師の方々質問に応じてくださるので安心して勉強を進めることができます。更に、本番直前には、本番さながらの模擬試験が用意されています。私はこの試験を受験することで、試験の雰囲気をつかめただけでなく、試験直前の重要な期間を自分の苦手科目に絞った効率よい勉強とすることに大いに役立ち、国内・総合両方に合格することができました。

皆さんも是非この講座を合格するためのエッセンスとして合格を勝ち取ってください。

(立教大学観光学部2年・女性)

## 2010年度「旅行業講座」日程・受講申込受付のお知らせ

2010年度「旅行業講座」の受講申込受付は4月1日(木)～4月14日(水)となります。国内旅行業務取扱管理者試験受験コース、総合旅行業務管理者試験受験コース、海外コース(すでに国内試験に合格し、総合試験受験を希望する者)の3コースから、ご希望にあったコースを選択頂ける、旅行業務取扱管理者試験対策としては大変歴史のある当研究所主催の公開講座です。

受講願書は観光研究所ホームページ  
(<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IT/>)

の旅行業講座、詳細・日程・募集要項のサイトからダウンロードが可能です。また、希望者には詳しいパンフレットを当研究所にて配布しております。郵送をご希望の方は、下記のE-mailアドレスにお名前、ご住所、旅行業講座パンフレット希望とご記入の上、メールをご送信ください。その他のお問い合わせは立教大学観光研究所事務局までどうぞ。

2010年度の時間割は下記の通りです。

立教大学観光研究所 (Tel : 03-3985-2577 Fax: 03-3985-0279 E-mail: kanken@grp.rikkyo.ne.jp)

月	日	曜日	火・木曜日 19:00～20:30		土曜日 14:00～15:30 / 15:40～17:10		7号館 7101教室	受講コース
			科目	講師	講師	講師		
4月	20	火	オリエンテーション	ジェイティービー能力開発	教材出版事業部 部長		内田 二郎	総合・国内・海外
	22	木	国内実務(観光資源 1)	ジェイティービー能力開発	専任講師		早川 喜世司	総合・国内
	24	土	国内実務(観光資源 2)	ジェイティービー能力開発	専任講師		早川 喜世司	総合・国内
	24	土	国内実務(観光資源 3)	ジェイティービー能力開発	専任講師		早川 喜世司	総合・国内
	27	火	国内実務(観光資源 4)	ジェイティービー能力開発	専任講師		早川 喜世司	総合・国内
5月	1	土	旅行実用英語	ジェイティービー能力開発	特別講師		片岡 保	総合・海外
	1	土	旅行業法令(1)	社団法人 日本旅行業協会	総合企画部 消費者相談室 調査役		下平 久人	総合・国内
	6	木	海外観光資源(1)	ジェイティービー能力開発	特別講師		片岡 保	総合・海外
	8	土	旅行業法令(2)	社団法人 日本旅行業協会	総合企画部 消費者相談室 調査役		下平 久人	総合・国内
	8	土	旅行業法令(3)	社団法人 日本旅行業協会	総合企画部 消費者相談室 調査役		下平 久人	総合・国内
	11	火	海外観光資源(2)	ジェイティービー能力開発	特別講師		片岡 保	総合・海外
	13	木	海外観光資源(3)	ジェイティービー能力開発	特別講師		片岡 保	総合・海外
	15	土	旅行業法令(4)	社団法人 日本旅行業協会	総合企画部 消費者相談室 調査役		下平 久人	総合・国内
	15	土	旅行業法令(5)	社団法人 日本旅行業協会	総合企画部 消費者相談室 調査役		下平 久人	総合・国内
	18	火	海外観光資源(4)	ジェイティービー能力開発	特別講師		片岡 保	総合・海外
	20	木	海外観光資源(5)	ジェイティービー能力開発	特別講師		片岡 保	総合・海外
	22	土	約款(1)	社団法人 日本旅行業協会	総合企画部 消費者相談室 調査役		下平 久人	総合・国内
	22	土	約款(2)	社団法人 日本旅行業協会	総合企画部 消費者相談室 調査役		下平 久人	総合・国内
	25	火	海外観光資源(6)	ジェイティービー能力開発	特別講師		片岡 保	総合・海外
	6月	27	木	国内実務(運賃料金1)	ジェイティービー能力開発	専任講師		早川 喜世司
29		土	国内実務(運賃料金2)	ジェイティービー能力開発	専任講師		早川 喜世司	総合・国内
29		土	国内実務(運賃料金3)	ジェイティービー能力開発	専任講師		早川 喜世司	総合・国内
1		火	国内実務(運賃料金4)	ジェイティービー能力開発	専任講師		早川 喜世司	総合・国内
3		木	国内実務(運賃料金5)	ジェイティービー能力開発	専任講師		早川 喜世司	総合・国内
5		土	約款(3)	社団法人 日本旅行業協会	総合企画部 消費者相談室 調査役		下平 久人	総合・国内
5		土	約款(4)	社団法人 日本旅行業協会	総合企画部 消費者相談室 調査役		下平 久人	総合・国内
8		火	国内実務(運賃料金6)	ジェイティービー能力開発	専任講師		早川 喜世司	総合・国内
10		木	国内実務(運賃料金7)	ジェイティービー能力開発	専任講師		早川 喜世司	総合・国内
12		土	約款(5)	社団法人 日本旅行業協会	総合企画部 消費者相談室 調査役		下平 久人	総合・国内
12		土	約款(6)	社団法人 日本旅行業協会	総合企画部 消費者相談室 調査役		下平 久人	総合・国内
15		火	出入国制度(法令実務1)	ジェイティービー能力開発	特別講師		片岡 保	総合・海外
17		木	出入国制度(法令実務2)	ジェイティービー能力開発	特別講師		片岡 保	総合・海外
19		土	出入国制度(法令実務3)	ジェイティービー能力開発	特別講師		片岡 保	総合・海外
7月		19	土	国際航空運賃(1)	マイバックカスタマーサービス部長			渡辺 清一
	22	火	出入国制度(法令実務4)	ジェイティービー能力開発	特別講師		片岡 保	総合・海外
	24	木	海外旅行実務(1)	シニア旅行カウンセラー			亀坂 興紀	総合・海外
	26	土	国際航空運賃(2)	マイバックカスタマーサービス部長			渡辺 清一	総合・海外
	26	土	国際航空運賃(3)	マイバックカスタマーサービス部長			渡辺 清一	総合・海外
	29	火	海外旅行実務(2)	シニア旅行カウンセラー			亀坂 興紀	総合・海外
	1	木	海外旅行実務(3)	シニア旅行カウンセラー			亀坂 興紀	総合・海外
	3	土	国際航空運賃(4)	マイバックカスタマーサービス部長			渡辺 清一	総合・海外
	3	土	国際航空運賃(5)	マイバックカスタマーサービス部長			渡辺 清一	総合・海外
	6	火	海外旅行実務(4)	シニア旅行カウンセラー			亀坂 興紀	総合・海外
8月	5	木	国内旅行業務取扱管理者試験 模擬試験	ジェイティービー能力開発			15:00～17:30	国内
	9	月	総合旅行業務取扱管理者試験 模擬試験	ジェイティービー能力開発			13:30～17:30	総合・海外

## 2009年度「ホスピタリティ・マネジメント講座」全講義終了!

当研究所が1946年より運営している「ホスピタリティ・マネジメント講座」(開講当時の名称は「ホテル・観光講座」)。2001年より現在の名称に改称)も、本年度で63年目を迎えました。

毎年観光業界の名だたる講師陣をお迎えしての本講座ですが、本年度は新たに、和倉温泉加賀屋代表取締役会長の小田禎彦氏をはじめ、観光庁審議官の甲斐正彰氏、株式会社リクルート旅行カンパニー執行役員の富塚優氏、フォーシーズンズホテル丸の内東京購買マネージャーの市橋純氏、前京王プレッソイン代表取締役社長の大館ひろし氏をお迎えし、内容も新たに充実した講義を3カ月半に渡り展開致しました。

9月下旬より12月中旬までという長期に渡る講座にも関わらず、最終日まで非常に高い出席率を維持できましたのも、各講義で得た知識を実務に生かそうとする姿勢を崩さなかった受講生の皆さまの向上心の賜物です。来年度も更なる内容の充実に向

け、事務局と致しましても最善を尽くす所存ですので、今後ともどうぞご期待ください。



講義風景(9月29日:「旅館経営の課題と展望」小田禎彦先生)

## 2009年度観光研究所活動報告

### ■公開講座

・「旅行業講座」(全46回)

実施日程/2009年4月21日(火)~7月11日(土)

修了証書授与式/7月11日(土)

受講生数(内訳)/113名(立教生・OB 104名、他大学 5名、社会人 4名)

講座修了生/109名

国家試験「旅行業務取扱管理者試験」合格率

国内/受講生 51.5%(全国平均 40.1%)

総合/受講生 30%(全国平均 25.5%)

・「ホスピタリティ・マネジメント講座」(全35回)

実施日程/2009年9月24日(木)~12月19日(土)

修了証書授与式/2010年2月27日(土)

受講生数(内訳)/65名(立教生・OB 16名、他大学 6名、社会人 43名)

講座修了生/46名

### \*ホテル見学会実施内容:

日時/10月19日(月)13:00~14:30

会場/ディズニーランドホテル

参加者/13名(事務局スタッフ2名 同行)

### ■ニューズレター発行

『観光研究所だより』

\*Vol.6.No.1 (Summer 2009)

巻頭インタビュー ~人を柱に成長するメトロポリタン~

日本ホテル株式会社 常務取締役、

ホテルメトロポリタン総支配人 塩島賢次 氏

\*Vol.6.No.2 (Spring 2010)

巻頭インタビュー ~今なぜ国家試験「旅行業務取扱管理者」資格取得が有効なのか~

株式会社 JTB能力開発 出版事業部部長 内田二郎 氏

## 受講生の声

### ●一流の講師陣による充実したカリキュラム

講師の先生方は各分野に精通され、日本の観光産業の最前線で活躍されている方々ばかりです。

全35回の講義では、ホテル業界や観光産業の実務的な知識から、マーケティングや経営戦略の実践的な理論まで幅広く学ぶことができます。実務経験に基づいた先生方のお話は新鮮な驚きの連続で、ホテリエとして自分のありたい姿を考える良い機会になりました。また、ホテルが立地する地域との関わり方、観光立国実現への課題、海外のホテル

業界最新動向等にも話題が及び、幅広い見識を身につける必要性を感じました。

私自身は社会人1年目の新入社員ですが、講義で学んだことをさらに掘り下げ、観光産業全体に貢献できるような人材になりたいと志を新たにすることができました。

ホテルに勤務されている方だけではなく、ホテル以外の観光産業の方、観光産業に就こうと考えられている学生の方にも受講をお勧めできる講義です。(社会人・男性)

## 受講生の声

### ●講義のレベルが高く、改めて学ぶ楽しさを感じた

私は中小企業診断士としてコンサルティングや執筆活動をしていますが、観光分野の事業を一層深く理解したいというのが受講の動機でした。製造業や流通業は納期・品質・コストの改良を日々行って競争力を高めています、ホスピタリティ産業には効率化されていない部分がたくさんあります。どの分野でどういう専門家の方が何に取り組んでいるのかが分かりましたので、将来的に連携できるよう観光分野でのプレゼンスを高めていきたいと考えております。

週3回の講義はなかなか出席が大変でしたが、改めて学ぶ楽しさを感じました。ホスピタリティの分野でこれだけ多くの専門家のお話を聞ける機会はこの講座しかないと思います。講座のレベルは非常に高く、経営者の視点から様々なテーマで学ぶことができます。立教大学だけでなく、広く門戸を開放している講義ですから、学生も社会人も興味のある方は是非受講をお勧めします。(社会人・男性)

### ●一流に接し視野を広げよう

昨日と同じ今日を過ごしていませんか?「課」の中の蛙になっていませんか?私たちが身をおいているこのホスピタリティ産業はとても幅が広く、奥が深く、そして未来への可能性があることを本講座で知ることができました。毎回の講師の先生は、普通に働いては決して出会えない第一線の方々ばかりです。私はホテルで働き始めて19年目になりますが、単に知識を得ただけでなく、気持ちがリフレッシュし、元気が出たという別の収穫もありました。働きながらの通学は本当に大変ですが、ぜひ時間をやりくりして受講することをお勧めします。学生の皆様には、社会人と一緒に受講するというだけで意味があると思います。社会人は、質問が秀逸です。一流に接し視野を広げることは、必ずやご自身のキャリア形成に役に立つことでしょう。これを読んでいる皆様とともに、明日のホスピタリティ産業の発展に僅かでも貢献できれば幸いです。いざ旅立たん!大海へ。(社会人・女性)

### ●貴重な体験からの学び

実際に観光業界の第一線で活躍している講師の方々のお話は、非常に興味深く、勉強になり、まるで毎回ゲストスピーカーの方がやってくる授業の様な贅沢な時間でした。また、学生だけの普通の大学での講義とは違い、講義の終わりにするどい質問が出るのも大変面白かったです。講師の方々は、限られた時間の中でより多くのお話をしようとして下さるので、用語や仕組みなど、学生には理解が追い付けない部分も多いかと思います。しかし、それ以上に、社会人の方々と共に夜の学校で机を並べて学ぶという貴重な体験から得る、たくさんの刺激と気付きはかけがえのないものだと思います。私は社会人の方々の学びに対する姿勢を見て、普通の大学生活における勉強の大切さに改めて気づき、今まで以上に観光というものに興味を持てたと思います。本当に素晴らしい

経験をさせていただきました。いつか社会人になったときにもう一度受講してみたいです。(立教大学観光学部2年・女性)

### ●使える知識、いかず知識

日本の観光を背負っている豪華講師陣の方々によって行われる講義は、大学の講義だけでは学ぶことのできない実践的な知識を吸収する良い機会になりました。

毎回、講義の行われる日は「どんな先生がどんな講座を開いてくれるのだろう」と心弾ませていました。そして毎回、強い刺激を受け、期待と満足が重なり合うような不思議な講義期間を送ることができました。観光がこれから、大きな成長産業になることは予測がついています。だから、観光を学べる教育機関が増えているのだと思います。しかし実際のところは、実践で使える知識の場の提供や生の声を聞く機会が少ないというのが現状です。その中で、日本の観光の第一線で活躍されている方の講義を聞くことができたことは、貴重だと思っています。この講義に出会い、さまざまな観光の視点を持つことができました。使える知識を学んだ私が、得た知識をどう実践でいかず知識へと変えていくか考えさせられる講義になりました。

(立教大学観光学部1年・男性)

### ●知識を得るだけでなく、幅広いつながりを作れるチャンス!

「色々なつながりをつくってこい」この講座を受けると決まって、上司から言われた一言だ。講座の内容はもとより、そこに集まる受講生、講師とのつながりも貴重な財産になる。その財産をつくるチャンスを生かしてこい、とのメッセージだった。

講座を受けるにあたって自分のモットーは、気になる人とは直接話せ。講義後も講師の方はみな丁寧に私の質問に対応してくれ、その後送ったお礼メールに返事をくれる方もいた。業界のスペシャリストからの講義は、自分のホテル知識の幅を広げてくれることは間違いない。また、全33回、約3ヶ月もの間いっしょに勉強する仲間の存在は刺激的であり、他業種の友人は新しい観点を自分にくれる。

ホスピタリティ・マネジメント講座は、業界知識を深めるだけでなく、幅広いつながりをつくりには最適な場であり、自分の財産として生かして生きたい。(社会人・男性)



講座オリエンテーション風景

## 2008年度研究調査報告

### 中国福建省・福清市の僑郷を訪ねて

立教大学観光学部教授  
松村公明

2008年12月に、中国福建省の省都・福州市を訪問し、都市・観光・交通に関わる地図を収集するとともに、福州市南郊に位置する福清市において、おもに『福建省地図冊』、「福州企業単位分布図」、「福清市旅遊交通図」（すべて福建省地図出版社発行）等の市販地図に基づき、市域を広く踏査した。福清中心市街地の「融城」は、福州中心市街地および福州長楽国際空港から南におよそ40kmに位置し、福州とは泉州を経て廈門（アモイ）方面に向かう瀋海高速道路（瀋陽—海口）と、それに併走する国道324号によって結ばれている。福建省を訪れる日本人観光客の多くは、廈門を拠点として泉州や永定の客家土楼を周遊するため、福清市に到達することは稀であるが、福清市は華僑の主要な故郷（僑郷）、とりわけ日本華僑の伝統的な僑郷として知られ、親地的な土地柄である。

福清市山間部に位置する黄檗山万福寺は、京都の万福寺の祖寺である。

「福建の特徴はゆたかな稲作と、良港に富む海岸線にあり、いわば右脚を水田にひたし、左脚を海にひたしているような土地であった」と司馬遼太郎はいう（『街道をゆく25 中国・閩の道』）。実際に福建省の地形をみると、総面積のおよそ90%を占める山地と丘陵が沿岸部に迫り、残された平野は、台湾海峡に面するリアス式海岸に沿って狭小である。耕地面積の不足を補うため、「梯田」と呼ばれる棚田や段々畑の開発が推し進められた結果、1955年に食糧輸入省からの脱却を果たした。武夷山脈とそれに並行する浙閩山地が、沿岸部から奥行き300kmの省土に横たわり、江西省や湖南省などの内陸地方と沿岸部との境界は、わずかな回廊を除いて閉鎖的であった。華僑の主要な故郷（僑郷）としての顕著な地域的性格は、このような孤立的な地理的位置と、3,300kmの海岸線を有する海洋性の開放的な風土によってかたちづくられてきた。

福清市は、福州市内の県級市（1990年に福清県から昇格）として、人口123.13万（2007年）、中心市街地を成す「融城」鎮と、その郊外17鎮7街道から構成される。融城の人口（城鎮人口）は10万1,198（2007年）である。福清市域は、市域北西の山間部と、融城市街地が位置する竜江流域平野部、さらに市域南東の竜高半島から成る。このうち、竜江流域平野部、とくに福清湾岸

域は、海口鎮をはじめとするインドネシア華僑の主要な僑郷が分布する。これに対して、竜高半島は日本華僑の僑郷に当たり、高山鎮、東瀚鎮をはじめとする半島先端部がその核心地域であった。竜高半島は降水量が少なく、年間降水量は1,200mmを下回る（福州は1,367mm）。その降雨も台風が襲来する秋季に集中するため、半島の山々は灌木に覆われ、伝統的に漁業、塩（塩田）、サツマイモの生産がこの半島の三大産業とされた。

この地域的な性格は改革開放（1978年末）以降に引き継がれ、同半島は、1980年代以降には、さらなる学歴・収入を求めて日本に到着する新華僑の主要な送地域であり続けた。とりわけ、1983年の日本側「留学生10万人計画」発表、1986年の中国側「公民出境管理法」施行などを契機として、就学ビザ・留学ビザの取得による日本渡航がブームとなった。1980年代に日本渡航を果たした帰国者の一人は、当時の雰囲気について「行きたくなかったが、皆が行くので仕方なく行った」と語った。

海外華僑がこの地にもたらす富は、今や福清市域の景観を著しく変容させつつある。竜高半島の特色ある集落景観の形成は、当時の日本渡航ブームによりもたらされた。日本渡航を果たした彼らは、送金または帰国後に故郷の農村地域から融城市街地にかけて、「別荘」（別荘）と呼ばれる中高層の洋風戸建て住宅を競って建設した。その結果、竜田鎮、三山鎮、高山鎮、東瀚鎮など、竜高半島の主要な農村集落は、軒並み中高層集落の外観を呈するに至った。竜高半島を省道に沿って縦走すると、遠望では次々に出現する大都市のビル街が、接近するにつれて農村集落の別荘群であることが判明する。

別荘内部の空間利用はさらに興味深い。1階は応接兼リビングとキッチン、2～3階までは寝室や個室として利用されているが、



写真1 ●福清市融城北西部に開発中の高級別荘街（2008年）

この地区は、融城を見下ろす竜山公園の西麓に開発されつつあるが、市販の地図には街路網を含めて未だ表示されていない。別荘の階数は、4.5階建てまたは5階建てで、スカイラインが整っているのがわかる。



上階部分は未利用階となり、最上階は物干し場や物置として放置されていたり、内装工事さえ施されていなかったりする。それでは、なぜ上層階まで建設するのかという問いに対して、ほとんどの住民は面子と答えた。とくに、両親のために建設する別荘では、隣接する別荘よりも低層となることは心情的に認められないという。日本からのJターンによって融城市街地に建てられた別荘の外観は、農村部のそれよりも瀟洒で洗練されている。融城北西部の別荘街を訪れると、まるで景観条例によって規制されているかのように、別荘街のスカイラインは水平に整っていた(写真1)。

海外華僑による大規模投資に関連する景観変化では、融城市街地の西部に向かって連担する郊外の新市街地には目を引く(写真2)。瀋海高速福清IC付近は、1992年に国家クラスの経済技術開発区(福清融僑経済技術開発区)に指定され、開発区から融城を結ぶ清昌大道を軸として、高層マンション、高級レストランやショッピングモールが入居する大型複合施設、高級ホテルなど、自家用車を所有する富裕層を対象とする近代都市が展開する。融城旧市街に目を転ずると、市政府前の街心公園を中心に、中国都市特有の稠密で繁華な界隈が広がっているが(写真3)、最近、その西側に近代的な高層マンションをともなう成竜步行街(ショッピングモール)が完成し、旧市街にも都市開発の波が押し寄せつつある様子が見て取れる。

南北を長江デルタと珠江デルタにそれぞれ接し、海峡対岸に台湾を臨む福建省沿岸部では、「海峡西岸(=海西)経済区」と称する開発計画が進展している。福州から福清、莆田、泉州、廈門(アモイ)、漳州に至る一列の都市群は、「福建沿岸拡大大都市地域」とも称され、長江デルタと珠江デルタを直結する回廊としてベルト地帯を形成し、海峡東岸に当たる台湾との緊密な経済交流圏の形成に期待が寄せられている。従来の福厦



写真3 ●福清市融城中心部の繁華街(2008年)

写真右が街心公園で、市政府に隣接する。10万都市の既存市街地中心部とは思えない活気に満ち溢れている。

高速道路(福州—廈門)は、瀋海高速道路(瀋陽—海口)の一部として、大陸沿海部を南北に結びつける自動車交通の大動脈に組み込まれた。さらには、これまで鉄道交通空白域であった沿岸部に、2009年秋の開業を目指して、福厦高速鉄道(福州—廈門)の建設が突貫工事で進められており、開業すると温福鉄道(温州—福州)とも接続して、最高時速250km/hでの営業運転が見込まれている。

福清市域の経済発展にもかかわらず、福清人の海外流出はますます勢いを増しており、福清における福清人の空洞化が懸念されている。とくに若年層の人口流出は、竜高半島農村部を端緒として少子高齢化を引き起こし、農業労働をはじめその他の低賃金労働は、内陸部からの出稼ぎ労働者によって担われている。両親の海外渡航にともない、子どもが祖父母に預けら

れたいわゆる「留守家族」の増大も社会問題となっている。「それでも福清人は海外を目指すでしょう。それが福清人なのです。」と流暢な日本語で語られた言葉が印象に残った。

本報告には、日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(B)(海外学術調査)「増加する華人ニューカマーズの中国における送出プロセスの解明」(研究代表者:山下清海、課題番号18401035、平成18～20年度)による2007年度の成果が含まれている。

#### 参考資料

小木裕文(2009):華人ネットワークの変容—福清僑郷と福清移民ネットワークを事例に—,山下清海『増加する華人ニューカマーズの中国における送出プロセスの解明』平成18年度～平成20年度科学研究費補助金基盤研究B研究成果報告書,pp.53-72.

張 貴民(2009):僑郷における農村景観と農業—福建省福清市を例として—,愛媛大学教育実践総合センター紀要,第27号,pp.1-11.

山下清海(2002):『東南アジア華人社会と中国僑郷—華人・チャイナタウンの人文地理学的考察』古今書院,190p.

山下清海(2005):『華人社会がわかる本—中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化』明石書店,241p.



写真2 ●福清市融城の西側に隣接する新市街地(2008年)

写真中央の大通りが融城と経済技術開発区を結ぶ清昌大道である。

新市街地の近代的な都市景観は、今や福清市を紹介するパンフレットやウェブサイトの表紙を飾るまでになった。

シリーズ

# 韓国最筋線 ~その十一~

東義大学校商経大学ホテル・コンベンション経営学科助教授  
劉 亨淑

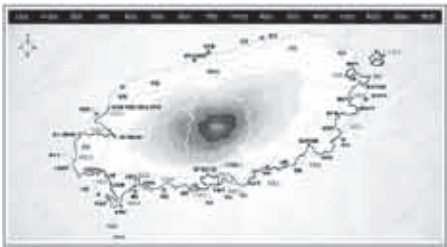
제주특별자치도의 올레  
濟州特別自治島のオルレ

今年新型インフルエンザの恐怖や長期的な景気の沈滞で国内外の旅行市場が縮小され、自治体の観光協会は伸びない観光客数に悩んでいるが、濟州特別自治島は2009年度の目標観光客数600万人が突破できると報告している(表参照)。

<表>濟州特別自治島(観光政策課)の観光客誘致実績

区分	2009年11月2日(現在)
韓国人観光客	5,002,571 人
外国人観光客	533,887 人

今年、濟州特別自治島における韓国人観光客の割合は8月までは団体観光客が多かったが、9月以降から団体観光客は減少して、個別観光客が大きく増加し、前年対比15.1%増という結果になったようだ。大勢の個別観光客誘致の役割を果たしたのは、韓国から海外へ行くアウトバウンド旅行市場が旅行のデスティネーションを国内の濟州島に換えたり最近濟州島の新たな観光資源として注目を浴びている「オルレ(올레)<sup>ii</sup>」や「オルム(오름)<sup>iii</sup>」などの観光商品の開発や広報などの成果であるといわれている。



東海岸(右)の1コースから最近完成された14コース(西海岸、左)までのオルレコース地図(濟州オルレのホームページより)

比較的西洋の人は、昔から自然の中で「トレッキング」という旅行の形態を好んできたが、韓国では最近まで自然の山道を歩くというトレッキングをあまり好まなかった。しかし、Camino de Santiagoというスペインの巡礼者の道、800Kmを36日間で歩き終えて帰ってきた徐明淑(ソ・ミョンスク)という女性が、世界中の旅行者のために濟州島のありのままのトレッキングコースを作ろうと決心し、実際それが「濟州オルレ」として現実化された。

彼女は自分の故郷である濟州島で、「(社)濟州オルレ」という非営利団体をつくって、ボランティアの人々と濟州島の隠れ道を捜し出し、車が近付くことのできない小さな道を見つけ、忘れられていた道を復元して徒歩旅行者たちが楽しめる新しいトレッキングコースを作り出したのである。また、(社)濟州オルレは1895年イギリスで始まったナショナル・トラスト運動のように濟州オルレ道を増加させ、維



(左)オルレ人のために道で開放されているお店のトイレサイン  
(右)オルレ道の中でのトイレのサイン(次のトイレまでの前後の距離が書かれている)



(左)オルレ1コースを歩く際に、海岸でイカを干しているのを見つけることができた  
(右)右側の木の枝に結ばれている青いリボンサイン(オルレ道の方向を知らせている)

持・管理するためにサポーターをオルレの主人として募集している。  
2007年9月、濟州の東海岸の第1コースから一般の人々にオルレが公開され西海岸へ進み、全14コースが現在完成されている。最終的には濟州島の全海岸道をカバーする予定であるようだ。個々のオルレコースは10~20 Kmの距離で構成され、徒歩で3時間から6時間程かかる短くない距離である。個人的にはオルレの中で一番美しいといわれる第7コースを歩き、つい最近第1コースも歩いてみた。オルレ道には石垣や岩の上に矢印が描いてあったり、木の枝にリボンが結ばれ道の方向を標示している。小さなサインを見のがさないために全ての風景に注意を払ってくださいとの願いもこめられているようだ。また、「オルレ案内所」が何箇所かのコースに設置され運営されていて、そこからオルレ道の地図やガイドブックを提供してもらうことや、オルレ記念品<sup>iv</sup>を購入することもできる。

山があるから山に登るといふアルピニストと同じく、濟州島にオルレがあるためオルレ人<sup>v</sup>が濟州島へ来るようになりつつある。観光客は新しいオルレ道が開放されるたびに濟州島に再訪問し、何となくリピーターになっていくのだろう。濟州島のオルレ道の成功を見習って全国の自治体は「歩きやすい道」、「テーマがあるトレッキング」づくりに熱心でもある。濟州島のオルレ旅行商品が韓国の大衆型旅行市場をより先進国型旅行市場に成熟させるのに寄与していると思っている。

i 筆者の学科の場合も、3年次対象の海外研修及び視察を濟州島に換えたり、他の学科でも秋の行事を濟州島で行ったことがある。  
ii 「オルレ」は大通りに各家の入口までの狭い路地を表す濟州島方言である。韓国語の発音でオルレは「こちらに来る?」という言葉と似ていて濟州オルレは「濟州島へ来ない?」という発音で聞こえたりもする。濟州オルレのホームページhttp://www.jejuolle.org/jp/course/co\_main.htmlでオルレに関する日本語の情報を得ることができる。  
iii 「オルム」は山の濟州島方言で、寄生火山丘という。濟州島には368個のオルムがある。オルムには多様な植物や動物があり、太古からの濟州の神秘を感じる事ができる。小さな丘であるため、簡単に登れる。  
iv 記念品としては、ハンカチやバフ(BUFF)がある。  
v 韓国語の表記では「オルレクン(올레꾼)」と書く。

劉 亨淑(ゆう ひよんすく)  
韓国・東亜大学校自然科学大学物理学科卒業。立教大学大学院観光学研究科博士課程後期課程修了 観光学博士。2002年4月~2003年3月立教大学観光学部助手。2003年4月~2004年3月立教大学観光学研究科専任講師。2004年3月~2006年2月韓国・東明情報大学校ホテル経営学科専任講師を経て2006年3月より東義大学校商経大学ホテル・コンベンション経営学科専任講師、2007年3月から助教授。

## シリーズ

## 九州便 ~第五報~

九州産業大学商学部観光産業学科准教授  
曾山 毅

## 九州国立博物館探訪

先日、太宰府の九州国立博物館が主催するバックヤードツアーに参加してきました。これは収蔵、修復、研究などの博物館の裏側を、定期的に無料で案内する九博独自の取り組みです。収蔵庫は内部を一部ガラス越しに見えるようするなど、見学することを前提に設計されています。このバックヤードツアーはボランティアの皆さんが案内してくれるのですが、九州国立博物館では約400人のボランティアが12グループに分かれ展示室の案内、体験活動のサポート、イベントの開催など多彩な活動を支えています。九博のボランティア活動は自主性を第一としており、研修をひとつ行うにしても、人のシフトなどの運営についてもボランティアの自主性に任せ、博物館側はそれに協力するという態勢をとっているそうです。

九州国立博物館は2005年10月に、国立文化財機構が運営する博物館としては東京、奈良、京都に次いで開館しました。九州・太宰府に博物館を誘致しようという動きは1890年代の太宰府天満宮関係者や岡倉天心による誘致活動までさかのぼれます。その後も何度か博物館誘致の動きがありましたが、結局実現しませんでした。1897年に設立された京都国立博物館から108年を経て、ようやく念願の地太宰府に建設されたのです。九博が他の候補地を問題にせず太宰府に建設されたことの根底には、太宰府政庁の存在があります。古代にあって九州を統括するだけでなく、外交と貿易の窓口としてアジアに開かれていた太宰府のもつ歴史性です。そして、用地の無償提供などを行った太宰府天満宮の協力態勢、地域住民の盛り上がり誘致決定の決め手になったようです。

九州国立博物館で最近話題になったのは「阿修羅展」でした。九博でもこれまで開催された特別展のなかで最も多い73万人の観

覧者を集めました。ところで、阿修羅像は九州国立博物館でつねに見ることができます。ただし、これはレプリカです。常設の「文化交流展示室」を観覧するとすぐに気がつくと思いますが、レプリカによる展示が目立ちます。現在九博に所蔵されている国宝はわずか3点です。東京、京都、奈良の国立博物館が所蔵する国宝は合わせて120点を越えています。九博は収蔵品という点では後発博物館の弱みがあるようです。



「あじっば」入り口

九州国立博物館は国宝・重文クラスの美術・工芸品を数多く展示する博物館というよりは、「日本文化の形成をアジア史の視点から見る」博物館といったほうが良いでしょう。九博では、交流史を軸としてアジアとの関係において見えてくる日本の歴史が、重要なテーマになっています。それが、常設展示室を「文化交流展示室」と呼ぶことにもつながっているのです。また、九博ではこうした展示が地域と市民にとって親しみやすく、「学校より面白く、教科書より

分かりやすい」ことを目標にしています。さきに紹介したバックヤードツアーにしても、子どもたちが楽しみながら文化や歴史を学べる「あじっば」、市民が誰でも持ちよった「お宝」を1ヶ月間展示できるスペースを設置するなど、さまざまなアイデアがそれを実現しています。

久留米出身の建築家菊竹清訓氏の設計による建物は、波をイメージした大きくゆるやかな屋根をもっています。この波形は周辺の山並みからイメージされた、アジアから九州に押し寄せる文化の波、竜を表したなどいろいろな解釈を耳にしました。読者の皆さんは写真をご覧になってどんなイメージをもたれるでしょうか。



九州国立博物館の外観



太宰府天満宮

曾山 毅(そやま たけし)

慶應義塾大学経済学部卒、立教大学大学院社会学研究科応用社会学専攻博士課程後期課程退学 観光学博士。1998年4月～2002年3月立教大学観光学部助手、2002年4月～2004年3月立教大学観光研究所学術研究員、2004年4月～2007年3月名城大学国際学部観光産業学科助教を経て2007年4月より九州産業大学商学部観光産業学科准教授。

所長の海外体験記

その9  
スリランカ・ヌワラエリアの  
Factory Hotelとそこでの出来事  
観光研究所所長 小沢 健市

本年9月、筆者は、再びスリランカを訪れる機会を持った。スリランカの世界遺産とヒルステーションの調査・研究ための訪問であった。調査地域は、文化三角地帯、そして文化三角地帯の外側にあるヌワラエリアとポルトガルによって建設され、オランダによって強固にされた要塞の街ゴールフォート旧市街であった。

今回は、ヌワラエリア地域の山の頂にあるFactory Hotelを紹介しながら、スリランカの高原リゾートとして有名な場所で遭遇した「驚き」について話してみたい。

ところで、Factory Hotelは、その名称が示しているように工場を改装し、宿泊施設として蘇らせたものである。もちろん工場と言っても、山の頂にある工場であるから、通常の工業製品を生産していた工場ではない。スリランカの工場であるから、察しのいい読者は既にお気づきのことと思うが、以前はTea



Factory Hotelの全景



Factory Hotelの客室

Factoryとして紅茶を生産していた工場である(写真参照)。スリランカには、かなりの数のTea Factoryが存在している。月に1度、ここで生産された紅茶は、首都コロomboまで輸送され、そこで競にかけられ、世界中へ輸出されている。一昔前、われわれ日本人が「セイロン紅茶」として親しんできた紅茶はヌワラエリア周辺にある茶畑が産地であったのかもしれない。

Tea Factoryを改装し、ホテルとして経営されているこの宿泊施設は、山の頂に立地していることもあって、周囲には広大な茶葉畑が広がり、ホテルの客室から眺めると、茶畑はまるで芝が敷き詰められているかのような錯覚さえ覚えさせる景色が広がっている。

Factory Hotelは、写真にあるように5階建ての建物であり、



Factory Hotelに設置されている客車を利用したレストラン

1階はフロントとレストラン、そしてバーから構成され、フロントの右奥には紅茶が飲めるスペースと紅茶の販売が行なわれているスペースが用意されている。

客室は2階から5階部分にあり、建物の中央部には通路があり、通路の左右に客室が配置されている。1階から各階の客室へはエレベーターを利用するが、そのエレベーターは、かつてはお茶の葉や紅茶を運ぶために使われていた古めかしい鉄の格子とその上に金網が張り巡らされている古風な、まるで1世紀も前に使われていたかのような代物であった。もちろん、鉄格子状のドアは自らが開け閉めするタイプのものであり、階を示す数字のボタンを押すと、「ドスン」といったような電源の入る音がし、上へと宿泊客を運んでくれる。

筆者は、次の日の朝食後に、ホテルから外へ出てみると、茶摘をしている男性の姿に気づき、

しばらく遠目ではあったが、お茶摘の様子を眺めるとなく見えていた。すると次第に男性が私の方へとお茶の葉を摘みながら近づいてきた。どの程度時間が過ぎたかは定かではないが、いつの間にか、筆者のすぐ真下の畝で茶摘を始めた。それまでうつむき加減に懸命にお茶摘みをしていた男性が不意に顔を上げたとき、筆者の目と彼の目が合った。優しそうな顔をした初老の男性であった。すると突然その男性は、筆者に向かって“money”、“money”と数回、声にならないような声を発した。筆者は、彼の口から発せられた“money”という言葉に驚きを隠すことができなかった。

周囲の素晴らしい景色とは相容れない、何ともいたたまれない、寂しい思いに駆られた一瞬の出来事であった。